



定例会報告

フレンズ国際労働キャンプ（F I W C）

関東委員会 2004・4

定例委員会報告 2004年4月号

2004年 4月3日 吉祥寺本町コミュニティセンター

参加者：藤沢真人、柳川義雄、茂木亮、伊藤祥江、三上大次郎、伊藤洋、坂田泰則、林尚徳、矢田祐美子

原田僚太郎、建部未央、吉田智大、矢部后代、山川将弘、飯高かすみ、立花ひと美、久保秀夫、西尾雄志、奥村浩毅

菅野俊昭、佐野一矢、田中佑也、佐塚あゆみ、滝沢里恵、田中三津子

目次

ネパールキャンプ・・・・・・・・・・ 2

ドウリシェー

ネパールキャンプ・・・・・・・・・・ 4

ティミ

フィリピンキャンプ・・・・・・・・ 5

リンホウキャンプ・・・・・・・・・・ 8

（中国）

呉川キャンプ・・・・・・・・・・ 11

（中国）

シンポジウム告知・・・・・・・・ 13

（日中韓学生によるハンセン病快復村

支援ネットワーク）

韓国キャンプ・・・・・・・・・・ 14

次回の定例委員会・・・・・・・・ 14

編集後記

ネパールワークキャンプ報告

FIWCで開催される第1回ネパールワークキャンプ！

場所はネパール、パルパ県、ドウリシエニー村。カトマンズから西へ向かうことバスで10時間、ジープで4時間、徒歩2時間半、ようやくその村は見えて来る。前回個人的に集まって開催されたキャンプでは幼児学校の校舎を建てた。そして今回のキャンプはトイレ作り。ネパールが大好きでまた参加してしまつた者、村人との再会に期待を膨らませる者、初めての海外でこんな僻地の村に来てしまつた者、それぞれの想いを募らせたキャンプが集まりキャンプは始まつた。



いることに手助けをしてきた。そんな彼に惚れ、沢山の日本人が彼の働きを応援した。そしてもちろん村人たちも彼を信頼した。

私たちもそんな彼に惚れた一人である。私たちはOKバジを通して今回ワークキャンプを開催することができた。

ワーク

今回のワークはトイレ作り。ドウリシエニー村にはトイレがなく、村人は少し裏に隠れて便をする。要するにどこでもトイレである。雨季になると野にされた便は水に流され、水を汚染し、これによって衛生状態は悪くなり病気が発生するそう。トイレは村人の健康状態を保つために非常に大切なものだが、しかしかつて村にトイレを作ってもうまく使われることは少なかった。いちいちトイレを使うのが面倒、子供が穴を怖がる、村人もトイレの必要性を強く感じていなかった。数年前、デンマークのレッドクロス、フィンランドのフィンダ、ノルウェーのレッドバーナーなどの団体がトイレの必要性を統計など使い、何年もかけて説いてまわり、その結果村人からトイレの



要望が多くなり、今回私たちにもトイレ建設の要望がきて、トイレ作りを行うことになった。

ワーク自体はとても単調。穴を掘る、石を運ぶ、石を砕く・・・こんなもんな。それ以外の仕事は難しかったため大工さんや村人が行った。各村人の家にトイレを建てたのでワークは3つのグループに分けて同時進行で進め、お互いが競争意識を持って争うように穴が掘られていったが、途中巨大な岩が出現したグループもあり作業は難航した。

岩運びは村のお母さん、子供たちと一緒に和気あいあいと、ヒマラヤの見えるのかな山の中腹の道を歩いた。ドコナム口と言われる道具を使うネパール流の石運びに初めのうちはキャンプも苦戦していたが、しだいに慣れて村人に負けないくらい石を運んだ。

もう一つのワーク。去年建てた学校の外壁のペイント。

注文したペンキがなかなか到着しない、やっと来たと思ったら全然違う色（白2缶、黄色1缶

頼んだら銀が2缶きた・・・がつくり、いろんなハプニングを乗り越えやっと完成したペイントは初めの構図とはちよつと違ったものになったが、これはこれでネパール味の味です。ネパールに行き村へ行くことがあれば是非この学校のペイントをご覧ください。

ネパールで一番おいしい日本食

トイレ作り以外にも昼には子供たちと遊び、お母さんと一緒に農作業をし、夜は飲み・歌い・踊り狂う、村人と交流し自ら楽しみ、村人たちを楽しませることはネパールキャンプのもう一つの使命。ワーク以外にも様々な行事を催した。

● 日本食

流しそうめん・ちらし寿司・ひじきの煮物・白玉のおしるこを作りました。珍しい日本食に村人たちも大喜びで、作った日本食はあつという間に無くなりました。

OKバジ

今のネパールキャンプにかかせない人、OKバジこと垣見一雅さんだ。彼がパルパ県ドウリマラ村に住み始めたのは10年前。それ以来村を歩き、村を見て、村人と話し、村人が困って



く感じていなかった。数年前、デンマークのレッドクロス、フィンランドのフィンダ、ノルウェーのレッドバーナーなどの団体がトイレの必要性を統計など使い、何年もかけて説いてまわり、その結果村人からトイレの

要望が多くなり、今回私たちにもトイレ建設の要望がきて、トイレ作りを行うことになった。



● レクリエーション

ドウリシェニー村をはじめ3つの村で、劇、踊りを披露しバレーボールを行いました。

● ピクニック

ワークの休息もかねて川にピクニックへ行き、ヤギをしめ水浴びをしました。しかし川まで山道一時間半あり、休息どころがワーク以上に疲れたという声も・・・

● ホーリー祭で隣村へ行く

ネパールのお祭りホーリー祭、隣村のサチコールに招かれネパールのお祭りを楽しみました。

● 古着配り

FIWCのOBの方をはじめ、多くの人から集められた古着、村人は普段袖がぼろぼろだったり、お尻に穴が開いている服を着ていて、古着は非常に喜ばれた。ドウリシェニーとブトゥケという隣村の人々に配った。

OKバジ10周年式典

OKバジがネパールの村に住み着くようになってから今年で丁度10年目。その間、学校を建てたり、水道を作ったり、橋を作ったり、様々なことをやってきた。そんな彼に村人たちは感謝し、彼のことをとても愛している。そんな村人の気持ちからこの式典は行われることになった。式典が行われたランプールには彼に会っために、また彼に感謝の気持ちを伝えようと一万人以上の村人が集まり盛大に式は行われた。

ネパールキャンプ報告会

日にち：6月6日(日) 時間：14:30～

場所：新木場の東京スポーツ文化館(文武)B会議室

質問等は右記の山川まで

岡山 山川将弘

私たちはステージ上で大根踊りを披露し、会場を盛り上げ(?)、その後一緒にバレーボールを観戦した。



FIWC初登場
伊藤洋
初キャンプ語る!!

今回、初海外・初ネパール・初キャンプの伊藤、洋です。私はキャンプに参加するにあたり、見たいもの、感じたいこと、あった。私は海外に行くのが、作られた街(つまり観光地)ではなく、その国の人々のリアルな生活が見たいと思っていました。そんな人たちが生活する場所に、私の求める笑顔やキラキラした子供たちの瞳が溢れているのだと想像していた。想像は現実となった。都会のカトマンスより、田舎のドウリシェニーの方が魅力的であり、ネパール人のリアルな生活を学ぶことができたと思う。「動く→食べる→寝る」という人間の原点のようなシンプルなライフスタイルが村にはあった。そして、そこには常に笑顔、人の温かさ、優しい、輝きに満ちた子供たちの瞳があった。村での生活は、毎日驚きと発見の連続だった。貴重な体験もたくさんさせてもらった。そういった意味で、私は初海外がネパールで良かったし、ワークキャンプで良かったと思う。その選択が自分にとって非常に良い選択であり、最適だったと思う。そんなキャンプで感じたいことがあった。「日本」という無数の物が溢れすぎていてに慣れている私たちは、慣れすぎて当たり前になっている事が多すぎる。私は私自身が何だかんだから日本より良い国、物が生活に必要不可欠な程度に少なく(これは言い方をすると誇張があるかもしれないが)日本より不便と感じる生活。そんな暮らしをすることで、「当たり前」を「当たり前」と感じない気持ちを持つことができた。感じることが、村で生活していく中で、見えてくる。感じるものに感謝の気持ちを持つ必要はない。自ら感じて、自分達が食べるものは自分達が稼いだ。実際に稼いだ所を見ることが、生命は他の生物の命をいただいているんだと感じる。生きているのではなく、生かされているのだと通感する。そして感謝の気持ちがそこに生じる。そうすると自然と「いただきます」と「ごちそう様」の言葉が口から出てくる。日本では「当たり前」のように食料は、買っているものも、村では収穫場所が始まる。「当たり前」という気持ちを、村にいる時に感じることができた。だからこそ、日本にいる今、自分環境がまた「当たり前」だと思える自分に戻りたい。村で感じた気持ちを忘れず、これからの感謝の気持ちを大切に、日々の生活を送りたいと思う。最後にもう一つ。月や星たちが輝くような光に遠ざかることなく自由に光々と輝く大自然とまるで自分の子供や孫のような日本人キャンプ生がわがやのような温かみで溢れ出ている村の中で大切に育てられて子供たちの瞳がキラキラと満天の星空のように輝いている理由が少しだけ自分たちが気づいた。私もキラキラと輝いた瞳でいつでも笑っていたと感じた。人々とのコミュニケーションは笑顔が大切!! これが今日のキャンプで私が最初に学んだことであり、最も必要だと思ったことだ。

素朴な国の素朴な村々、素朴な大空の下で素朴な村人とバジと子供たちとホレーと笑いに満ちた最高の12日間。笑顔が絶えない村にいた私は本当に幸せ者だった。私を取り巻く環境は2年間の人生の中で最高のたとえ胸を張って言う。そしてそんな体験でできた私は今も幸せ者だ!! 俺に笑顔を見せてくれたみんな、本当にありがとう!! みんなの笑顔を見てお見かね、俺も笑顔が絶えなかつたよ。本当にありがとう!!

ALL YOU NEED IS LAUGH!!

バブル 洋

ティミキャンプ（ネパール）

2年のブランクを経て久々にティミキャンプが復活します！

2002年2月のキャンプまではカトマンズ郊外にあるティミという町で知的障害を持つ子供たちのための学校建設に携わってきました。この2年間、ワークキャンプは開催できなかったものの、宮本久美子さんを始めとするキャンパーたちがカンパを集め、それによって未完成だった校舎も完成目前となりました。しかし、学校全体としてはまだまだニーズがあり、ネパール側からの希望もあって今年の夏、再びティミキャンプを開催することになりました。ティミとこれからもつながっていく為に、またティミの自立を考える為にも必要なキャンプだと思っています。

期間は9月中旬（予定）、ワーク内容は学校の周りのフェンス作りを予定しています。まだ動き出したばかりで内容が未定ですがネパール側と話し合い決まり次第お知らせします。



スタッフ大募集

スタッフにはキャンパーが感じる十倍以上にキャンプを楽しむことが約束されます。それに今なら！アナタ次第でどんな楽しいキャンプにすることも可能（内容があまり決まっていけないので...）一緒にキャンプを作っていきましょう！

岡佐塚あゆみ

そのあなたネパールについて

語ってみませんか？

きたる5月22日、ネパールキャンパー主催ネパールについて真剣に話し合う会（通称、ネパール会）を堂々開催！

ネパールキャンプに参加した方々！ なつかしい話に花をさかせよう！ そして、老いも（？）若きも、いっちょネパール魂で集いましょう。

当日は、各回、参加者対抗のゲームなんかもやる予定。しかし本当の目的はキャンプに行つた時の自分の気持ちを思い出すこと。共有すること。時間が経つて、「いい思い出」になりがちのところを、今の日本人キャンパーの生活にどれだけキャンプでの経験がスパイス的に振りかかっているかを考える機会にしたいと思っています。

ネパール人は、今どんなふう生活してるんだろって、一緒に想いを馳せよう。なんて、ことも頭にいれつつ、とにかく楽しくのみましょーいっつう

岡宮本久美子

引き続きネパールキャンプ（ティミ、ドウリシェニー）カンパ募集しています。

郵便口座：記号、10220 番号 84286991 名義：山川将弘（どちらのキャンプに対してか、ご記入下さい）

ネパールキャンプ掲示板：http://6108.teacup.com/kumi/bbs



ありがとう!!

ございました!!

こんにちは！以前、ネパールティミの学校へのカンパを呼びかけました。宮本久美子さん。以前、FSC定例会報告にて、元山村で行われたワークショップの後、実は予算不足で建てた学校の一部がまだ「使うことができない状態であることを報告し、カンパをお願いしました。そして、たくさんの方から、たくさんのカンパ！もんでもって、たくさんのあたたかい言葉を頂きました!! 本当に皆様、ありがとうございます。このお金は、無事に、山川くんが学校に届けてくれました。報告を遅らせていますので、これからもうかがいさせていただきます!!

ミヤベト ● miyakumic@hotmail.com

大野 薫さん・小河原 英貴さん・
一色 崇典さん・鈴木 孝三さん・島居 厚志さん
宮部 一孝さん・梅山 武史さん・茂 林 敏さん
和田 昭彦さん

王見役キャンパーから
08まで、関東から関西、
キャンプと関、たこの
ない方からまでも！熱烈感謝!!
まだまだ受け付け中ですので、
さあ！おさいふもって LET'S GO!

5/22 第1回 ネパール会!! 18時へ
今までネパールに参加した方
ゆびにさしおきよう! 詳細は
掲示板にて

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

フィリピンワークキャンプ報告

フィリピンキャンプは、2月13日～3月3日（先発隊は2月9日から）からフィリピンのレイテ島にあるナガという村で行った。この村でのキャンプは今回が2回目で、前回（2003年夏）



のキャンプでは水源からパイプを通して村まで水をひき、タンクを作り、そこから村の一部にパイプを張り巡らせ、水道を作った。しかし、前回に作ったタンクが小さかったため、タンクに溜まった水がすぐなくなり、水がでなくなる箇所があった。そこで今回は、もう一つ新しくタンクを作り、水が行き届くようにした。また、ナガの入り口となっている川にハンギングブリッジを作った。この川は、乾期は水が流れていないが雨期になると豪雨で川の水が増水し、渡れなくなってしまうからだ。ワークはタンク作りとハンギングブリッジを同時進行で始めた。橋の支柱を立てる穴を掘るのやセメント・砂利運びは結構ハードなワークだった。それ以外は、セメントを捏ねたり、橋の足場をボルトで固定したりと比較的簡単な作業だった。

村人の協力もあり、順調に進み、予定より早く完成させることができた。

今回のキャンプでは新しい試みとして、現地の大学（LSU）に通う大学生を呼び込んで、私たちのワークキャンプに参加してもらった。これは、同年代の現地の学生と共にワークし、生活すること、お互いの文化・生活を知り、また、私たちのキャンプを客観的にとらえてもらうことを目的として行った。



キャンプに参加してくれたのは、7人。ワーク中は驚くほどのスタミナで穴を掘り続け、日本人より率先して参加してくれた。そのお陰もあり、ワークが早めに完成することができた。キャンパーとは英語またはビサヤ語（現地語）で会話をし、ワーク中ふざけあったり、夜遅くまでお酒を飲んだり、すぐに打ち解けることができた。特に恋愛話をするやテンションが上がったり、異様な盛り上がりだった。村人との普段の会話で、LSUの学生が中間に入って通訳してくれたので、同時に村人とも仲良くなった。オフの日には、個人的にLSUの学生の家を訪問したり、一緒に買い物に行ったりと、お互い楽しく過ごすことができた。

キャンプ中は、2軒の家に村人と同居という形で滞在させてもらった。男部屋は4人の家族と、女部屋は女性1人と同居をした。食事は、食事当番をキャンパーの中で回して4、5人のグループで朝・晩26人分の食事を作った。26人分の料理なんて経験したことがなかったので、初めはみな戸惑いながらも、オリジナルな物を作りもてなしてくれた。適当に組んだ食当は、料理ができる人・できない人が偏り、縦にうなずくおいしいものもあれば、首を傾げて眉間にしわがよるような味のものもあり、いろんな味が楽しめた。LSUの学生にも参加してもらい本格フィリピン料理を作ってもらったが、本当に美味しかった。きっとキャンプ中で、一番の出来だっただろう。反対にLSUの学生には、私たちが作った料理が口に合わなかったようで、無理して食べてもらいとても申し訳ない気がした。

それぞれが楽しい時間を過ごした。ホームステイ最後の日には、カレーやお鍋、肉じゃが、おにぎりなど日本料理をもてなしている家庭もあった。フィリピン人の口に合うものや合わないものもあったが、その行為をととても喜んでくれていた。キャンパーの中には血洗いや水汲みを手伝っている人もいて、ホームステイは村人の生活や水の大切さを知るいい機会になったと思う。

ナガは他の村から離れた山間部にあるため、日本人どころか他の村の人もあり寄り付かないところにある。前回・今回とこの村でワークキャンプを行い、村の生活も大分変わってきた。私たちが水道を作り、水を身近なものにし、それをきっかけに今では村人が自分たちで水道の数を増やして生活向上を目指している。私たちのやってきたことが、村を良い方向に向かうきっかけとなれたことを誇りに思う。今後のキャンプでも何かのきっかけとなれるようなことをやっていきたい。

今回も1週間のホームステイを行った。各家庭に1～2人滞在させてもらい、朝・晩の食事などを共にした。それぞれお土産に日本のお菓子やおもちを持っていき、家族を喜ばせていた。ほとんどの家庭に小さい子供がいたので、日本の遊びを教えたり逆に教わったり、タタイ（お父さん）やナナイ（お母さん）と毎晩のようにお酒を飲んだり、そ



今回

エンタメ活動にも力を入れました

【1】小学校で課外授業

NAGAの子供たちも通っているティナガンの小学校にて。キャンパーが各学年に別れ、日本特有！の遊びを披露。言葉の壁も、LSUの学生の協力で多少はカバーされました。キャンパーに対する子供の人数が極端に多く大混乱になってしまった学年もあったようですが、みんなが楽しめたという意味では、大成功ではないでしょうか。

【2】運動会開催！

小学校での反省からNAGAの子供たちをターゲットにと、村のバスケットボールコートにて開催。告知不足でなかなか人が集まらず、どうなることか心配でしたが、始まってみれば大盛り上がり。紅白の鉢巻をして、手押し車やパンくい競争などを行いました。二人三脚は何か違う競技と化していたものの、みな笑顔があふれていました。

ソーラン節を踊ったあとは、流しそうめんを締めくくり。朝から動いてくれたエンタメ係さんお疲れさまでした。



反省会にて

（今後の展望）

■ ワークで「疲れた」となることがあまりなかった。

LSUの学生（フィリピン人）の力が大きい。また、感覚の違い（ズレ？）からか、日本人にやらせてもらえなかった。

意見

甘えの部分もある。もっと自分から積極的にアピールすべき。また、ワークを通じてコミュニケーションしたいということをきちんと伝えた方がよい。

1 OR 2 日間は「ワークがしんどい」と感じる日を作ってもよいのでは？

■ よくしてくれる村人に甘えてしまっていた。

同居なのに、配慮が足りなかった。（自分の家であるかのように振舞う）『楽しい』が先行してしまっ

意見

STAFFの立場からは、自分で感じ取ってほしいと思っていたが、限界があったのでは？行動に移せるよう、早めに気づかせることも必要。（放任しすぎはよくない。）また、そのためにもフィリピンに行く前に、目的意識をつけさせることも必要では。



■ 現地の学生について、今後も一緒にキャンプを行っていくのか。その場合、参加費をどうするか？（今回は無償）！
対等ではない。お金を払ってないから、不満があっても言えないのでは。

意見

相手の事情（経済的・感覚的なもの）を事前に知っておく必要あり。そのうえで検討すべき。将来、フィリピン人が主体になり、日本人が下見に行く必要もなくなる…なんてことが実現するかもしれない。

上記以外に、今回キャンパーの半数がひとつの大学に集中してしまった為、キャンパー集めの方法についての意見もでした。

今後のフィリピンキャンプ

次回スタッフに、今回のキャンパーから数人名乗りを上げてくれました。5月中旬、下見に出発します。キャンプは2004年夏に開催予定です。

関 矢田祐美子



FIWC in 九州

皆さま、こんにちは。私はこれまで関東委員会主催のフィリピンキャンプに携わってきた日下渉、通称ぬけといいます。2年前には、皆さまの支援を頂き、フィリピン現地駐在員をさせて頂いたこともあります。しかし3年前から福岡に引越してしまっただので、残念ながら、あまりフィリピンキャンプ以外の場に参加することができなくなっていました。

そこで自己紹介を簡単にさせて頂きますと、私はフィリピンで人生を愉快に間違えてしまった、よくありがちなダメ人間の一人です。フィリピンへの思いを断ち切れず、幾度か就職活動を試みるも、最終面接を目前にしてフィリピンへ逃亡するなどして結局挫折してしまいました。仕方がないので、今は大学院で大好きなフィリピンについて勉強しながら、なんとかフィリピンをネタにして、ごはんを食べていく道はないかと考えているところです。

ところで、このたび私は、九州でフィリピンキャンプを実現させ、またその母体として九州委員会を立ち上げようと決心しました。福岡に移り住んでからこの3年間、福岡やフィリピンにいながらずと関東のフィリピンキャンプに関わってきたのですが、実は最近、この関わり方に限界を感じ

じるようになっていました。

というのは、日本での活動に十分に責任を持つことが困難であるし、重要な打ち合わせなどで東京へ行くのも金銭的な負担が大きいです。また昨年8月に、仲間たちと協力して、念願のホームステイ、大規模な水道建設、そしてマニラから招待したフィリピン人との共同キャンプを実現させると、関東フィリピンキャンプにおける「コーディネーター」的な自分の役割は一段落したような気がしてきました。ホームステイやフィリピン人学生との共同キャンプのような「形」がいったん確立されてしまえば、もう自分などがいなくとも、それは今後も引き継がれていくことでしょう。そのため、福岡をベースにフィリピンキャンプを立ち上げたい気持ちに駆られるようになってきました。自分の知る限り、福岡では、F I W Cのように素人が手作りでキャンプを作っているような団体はまだ数少ないように思います。そこで、自分がF I W Cでこれまで学んできたことを活かして、福岡で新たな活動を展開していくことによって、国際協力やボランティアなどに関心を持つ人々への受け皿を提供することができるのではないかと考えています。

さらに、自分がフィリピンキャンプという「きっかけ」を提供し、数年間にわたって中心的な役割を果たせば、その後はやる気のある若者たちが活動を引継ぎ、その幅を広げていってくれるだろうと期待しております。つまり、自分が「きっか

け」となることで、九州でも様々な活動が花咲くようになるだろうと願っています。

具体的には今月からメンバーを募集しはじめ、夏に下見を行い、翌年の春にキャンプを行う予定です。自分一人でプランを全て立てれば、夏にキャンプを行うことも可能なのですが、キャンプを一から作り上げていくプロセスを共有し、若い仲間たちにキャンプ運営のノウハウを確実に伝えて人材を育成していくために、あえてこうした計画にしました。

なお、フィリピンでキャンプをするのは、自分が最も得意とする地域であるからに過ぎず、単に初めのきっかけを提供するために過ぎません。つまりフィリピンだけに活動を閉ざしてしまうつもりは一切ありません。むしろF I W Cの枠内で活動を展開していくつもりです。他委員会の多様な活動やネットワークと積極的に交流し、さらなる可能性を展開していきたいからこそです。息の長い活動にしていきたいので、今後もうそろしくお願いします。

最後に私がこのような活動を立ち上げる気になったのも、現地駐在員時代に、現地語を習得でき、人のネットワークを拡大でき、また現地の事情にも随分と通ずるようになったことがあります。支援金を送って頂いた方には改めて感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございました。

関田下歩

スタッフを終えて

今回でキャンプは2回目。今回は、海外もワイクキャンプもトイレの紙がなくて手ですませたのも、何もかもが初めてで全部が新鮮だった。ワイク目的で応募した私は、ただひたすらパイプをうめる穴を掘って掘って掘って...とりあえず掘っていた。日本に帰ってフィリピンに行つてよかったと思つたのは、体重計にのつた時だった。20日間4Kgのダイエットに成功したのだ。キャンプっていいなあ。そう思つた。もちろん、キャンプ中穴とばかり向き合つていたわけではない。子供と一緒に木登りしたり、踊ったり、キャンプとキャンプについて話したりとそれなりに楽しんでた。しかし、自分から積極的に村人と関わつたり思ひやりできなかった。納得のいけるキャンプにならなかった。ただ楽しいだけで終わってしまった。そのことが自分の中でひっかかり、リベンジをしようと考えた。そして、思い切つてスタッフをやることを決めた。周りからかなり勧められたというのもあったが、人を引っ張っていく役を今まで経験したことがなかったので、挑戦してみたかったというのもあった。生活係を担当することになったが、生活の仕事は広く、キャンプが始まってからも何が自分の仕事なのか理解できないでいた。

スタッフの仕事は、自分で見つけてやるものばかりだったので、周りに目をやる必要があまり得意でない私にはなかなか見つけることができた。

かつた。いつも与えられたことをやっていて、与えられたことですらきちんとできていなかったこともあったので、自分で仕事を見つけないこととは、とても難しいことだと痛感した。しかし、それを心がけていたことでキャンプに対する姿勢が前回とは異なっていた。なるべく周りに目をやるように努め、血洗いなど地味な仕事ばかりだったが、自分で気づき進んでやるようになってきた。スタッフとしてだけではなく、メンバーとしても広い範囲で村人と関わるようになった。ピサヤ語(現地語)を少し話せるようになったので、自分から積極的に話し掛けるようになり、いろんな年代の人とコミュニケーションがとることができた。

私自身まだまだなっていないところが多く、未熟なままキャンプは終わったが、スタッフをやったことで得られたものがたくさんあった。メンバーとしても再びナガで生活し、水の大切さ貧しさを改めて考えるようになった。まだまだ納得のいけるキャンプにはならなかったが、前回とは違う視点でキャンプを捉えることができた。今回で終わるのではなく、今後もいろんな形でキャンプと関わり向き合っていきたい。

矢田 祐美子



リンホウキャンプ報告

● ワーク内容

キャンプ地は中国広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村（ハンセン病回復村）

今回のメインのワークは集会所の建設。集会所とは、主にリンホウの村人が使う施設では無く、今回の様なワークキャンプに参加してくれた人や中国の学生たちがリンホウ村を訪れた際に、そこで集会をしたり、泊まったりする施設のことです。では、なぜ村人用ではないのにこのような施設が今回のメインワークとなったのか？

長年の隔離、いわれの無い差別等が彼らにもたらした影響ははかりしれない。しかしある村人は、「このワークキャンプによって、日本からキャンパーが来てくれたり、地元の学生たちが来てくれたりする。これは、我々にとって、命をつなぎとめているものである、と言っても過言ではない。」と言ったそうです。この村で、初めてキャンプをおこなった際、当時の村人は死ぬことばかりについて考えていたという。確かにその状況は変わらないうが、今では他のことも考えることができるようになった。それがこのワークキャンプの目的の一つだと思う。初めはそうではなかったが、言葉や筆談や彼ら自身の行動、さまざまな形で今では度々我々に話しかけてくるようになった。もちろん、それで彼らの精神的な傷が癒えるはずは無い。しかし、このことが決して彼らの命の灯を消すことは無い。我々は彼らの話をもっと聞

いていきたいし、彼らも我々との交流を楽しんでいる。もちろん、この施設はキャンパーだけではなく、中国人の学生、いや、中国の人々にとってもただこの村に来るだけではなく、何度かここを訪れて欲しい、もっと多くの人々がここに来て欲しい、という意味合いも兼ねている。このような歴史があつたことをもっと多くの人々に知ってほしい、未だにあるハンセン病に関する誤った知識をも改善して欲しい。このような理由で、今回のキャンプのワークは集会所建設に決まった。

● メンバー紹介

今回のワークキャンプでは、1人1リーダー制を採用しました。つまり、1人に1つは重大な役割が任されたわけです。

林 大佐久

早くも3度のワークキャンプとなった私。今回はリーダーとしてこのキャンプを行った。

原田 僚太郎

言わずと知れた中国リンホウ村駐在員。いつも、村人の視点からものを考え、アドバイスをくれた。

清水 あゆこ

韓国キャンパーとしてワークキャンプの経験はあるが、中国でのワークキャンプは初めて。キッチンリーダーを担当し、次の日の当番を決めるとともに、彼らを統率した。

吉田 良輔

自身もワークキャンプのリーダーを務めた2月のキャンプ後、リンホウキャンプにも参加。中国キャンプ常連の熱いメンバーの1人である。

建部 未央

初ワークキャンプ参加者。会計を担当し、今回のワークキャンプの財布を管理した。

藤井 歩

初ワークキャンプ参加者。記録を担当し、毎回行われる夜のミーティングや、それ以外にも大事なことは全て、ノートに記録した。

吉田 智大

初ワークキャンプ参加者。ワークを担当し、ワークの際には、皆を統率するとともに、自分も1番汗を流す。

許 淑琦

唯一の中国メンバー。

全日程参加

した中国人

は、今回彼

女1人。村

人と我々を

つなぐ掛け

橋として大

いにその力



● キャンプ概要

今回のキャンプは3月12日から26日までの2週間で行った。

ワークキャンプ前後広州に数日滞在し、そこで宿泊はHANDAという今回のリンホウ村の様なハンセン病回復村を我々みたいなボランティア団体に斡旋している団体の助けを得て、その施設に泊まることとなった。広州にいる、多くはこういったワークキャンプに参加した学生たちと話をする機会を持つことができた。彼らと話をしていると、ふと自分たちが日本人であることを忘れてしまい、と同時に逆に自分たちが日本人であるといことも痛烈に感じられ、広州での日々は非常に複雑なものだった。

広州から潮州への移動手段は、これまではバスを使っていたが、今回は電車を用いた。そして、潮州に着きタクシーでギョウギョウになりながらも、トンネルを越えリンホウ村に辿り着いた。

電車が大幅に遅れ、もう日が暮れてしまっていたのだが、村人、現地の学生たち、そして亮輔は我々を暖かく迎えてくれた。どちらかと言うと、待ちくたびてしまったという印象の方が強いです。過去にこの地でキャンプに参加したメンバーとしては、やはり懐かしさを感じられた。ここではあるワークキャンプ初体験のキャンパーの村の印象を紹介する。

” 暗いトンネルを越えて、がたがたの山道を走ってようやくリンホウ村に着きました。あのトンネルの存在に隔離の実体を見た気がする…。村の第一印象は、「THE集落」だった。”

リンホウ村と街を結ぶ一つの長いトンネル。このトンネルは最近できたもので、それまで、街から村に行くまでに山を迂回し遠回りをしなければならなかった。今回、その道も通らせてもらった。非常に遠く険しい道のりなのだが、これでもリンホウ村は他の回復村に比べ、街との距離があまり離れていないらしく、過去のハンセン病に対する根強い差別が垣間見える瞬間であつた。未だに、街の人々が村に行くということは無く、多くの村人が街に行くことも滅多にない。我々にとって、このトンネルは一つの村への目印でしか無いが、そこには、彼ら村人の追ってきた過去の歴史が詰まっているように感じられた。

ワークキャンプがスタートし集会所建設が始まった。ワークキャンプにおける基本的な生活は、朝ご飯の後、ワークをし、疲れたら自由に休憩を取り、昼ご飯の時を迎え、お昼はゆっくりして、夕食前までのワーク。もちろん自由に休憩を挟みながらです。もちろん個人個人で異なるが、今回はこの休憩の方がワーク時間より皆数段長かったようだ。キャンプ中ワークに参加してないあるキャンパーがいると、村人と話してたとか、中国語を教えてもらってたとか、お茶を一緒に飲んだとか、ひどい時には、お酒やお食事をしてきた

という、ケースもあった。潮州では、お茶に関する独特の文化がある。小さな可愛らしいカップに熱いお茶を並々と注ぎ、それを村人はすすめてきて、それを飲み始めると彼らと話をしながら2杯、3杯、と同じお茶を飲む。よくワーク中に村人がすすめてくるので、これに捕まると、毎回、1時間位、彼らに付き合つのです。最初は非常に渋く感じるお茶も、この村を去る頃には忘れられない味となっている。変わった風習と言えば、男性に對しタバコをすすめて合い、その後、コミュニケーションをとるといふものもある。タバコを断るのは失礼な事とされてしまい、この習慣のせいでタバコを吸うようになったキャンパーもいる。

ご飯は当番制で当番の2人が、朝市場に買出しに行き、昼・夜・次の日の朝ご飯・休憩の際のお茶を、作った。皿洗いは、ゲームをして、負けた2人がこの仕事をこなた。

夕食後は、温水シャワーを使ったり、洗濯をしたりなどして、その後9時半から10時位にミーティングに臨んだ。ミーティングでは、基本的にワークの状況、明日のワーク内容、明日の食事当番等を話し合い、その後は自由な時間となる、というのが普段のスケジュールである。

” 「この人たち（私達日本のキャンパー）は私達のことを怖がらなかったよ。BRAVEだ。」と村人が言っていたらしい。なんだかなんとも言いがたい感情に飲まれて涙が出た。「何言ってるの

ー！」って言葉だけが頭の中にずっと響いていた。私が今の行動を取っているのは、村人と仲良くするのは、自分がそうしたいから。一緒に時間を過ごしたいと思うから、近くに寄っていくんです。”

これはワークキャンプが始まって早々に、あるキャンパーに起きた事件だ。何もかもが初めてのキャンパーにとって、これから1週間強、共に生活する村人たちと仲良くなりたと思うのは自然なこと。今回のキャンプ地、潮州では潮州語という独特な言葉が話され、普段のコミュニケーション、つまり村人同士の会話は潮州語を用いる。週末には、付近

の大学から、たくさんの方がこの地に訪れ、村人との会話が困難な際、中国の学生を通して英語に翻訳してもらつこともあったのだが、これは、その際村人が学生に言った言葉だったのだから。全てのことから初めて、言葉も違う世界に住み始めたキャンパーにとって、近くに人、これから仲良くしていきたいと思っている人がこんなことを言う、このメンバーにとつてどれだけ心細く、悲しく感じたことだろう。しかしながら、自然と村人はこういったことを口にします。自分たちを過剰に碑下し、死にたいと言います。長い年月で負った彼らの心の傷、こういったことは何度もこのキャンプでは痛いほど経験した。

集会所建設。これを建設の知識の無い我々だけでやるのは不可能であり、今回現地の業者さんを



雇い、彼らの仕事を助けながらの作業になった。しかしながら、初日から、業者さんにクレームをつけることになる。問題は、すぐに壊れるものレンガと粘土質の多い接着力の低いセメントを使った雑な作業に對してだ。業者さんはこれに對し、この部分は土に埋まってしまう部分なので心配する必要が無い、という見解。私たちは集まり、会議をし、結論的には一度全てを壊し、業者さんにまた一からやり直してもらつということになり、つまり最初のワークがせっかく作ってきたものを破壊するという事になった。これはもちろん予想外のことで、当初は、時間内に完成しないのではないかという、不安が皆の脳裏をよぎった。その後、ワークは順調過ぎる程順調に進み、土を運び根本の地盤を平らにしたり、セメントを捏ねた

り、そのセメントを業者さんに運んだり、集会所の周辺に水路を作ったりと、集会所建設というワークに従事した。業者さんの早すぎる仕事ぶりによって、他に、ある村人の家の前のスロープを舗装したり、古いトイレの屋根を壊して新しくしたり、といった小さなワークも2、3こなした。そして、次の屋根のレンガを積むという仕事で、これらのワークは業者に任して欲しいとの意向により我々は潮州の街に観光に出かけたのだった。

潮州観光における特質すべき点は2つある。1つは、sukyo許淑の友人の家を訪れたこと。一般的な中国の人々の暮らしを垣間見、普段どのようなものを彼らは食べているのか、身をもって体験できた。

次に、sukyの大学に赴き、現地の大学生と直に交流したこと。最初は彼らとミーティングの機会を持ち、今回のワークキャンプについて等を話したのだが、彼らにとっては、日本人が珍しく、質問の内容は残念ながらこのことばかりだった。その後、スポーツ交流、食事会と、たくさんの学生たちと話す機会に恵まれたが、彼らがリンホウ村に来てくれるのかは疑わしく、先にも述べた通り、日本人に対しての興味が優先してしまうというのも悲しい現実だった。

業者さんの急ピッチの作業により、予定よりもかなり早めに集会所が完成した。リンホウ村において、集会所建設といった大きなワークはもうな

いものの、小さなワークはたくさん残っていたのでそういったワークをこなした。

リンホウ村でのワークキャンプでは、村を出る前に村人たちとパーティをするのが恒例の行事になっている。みなでお酒を飲み、おいしいものを食べるといった簡単な送別会のようなものをした。

パーティでは、お酒が手伝わせたせいか、村の人々のテンションは上がりっぱなしで、途中で寝ちゃった村人もいれば、皆飲みすぎだと考え、お酒を隠してしまった村人もいた。この光景を目のあたりにして、嬉しかったのでしよう、僚太郎は気持ちよく、眠りについてしまった。眠ってしまった彼を、村人たちは毛布をかけたなり、枕をしいたりと、これでもかという程手厚く労わる。彼をどれだけ村の人々が大切に、大事に思っているのか、再認識させられた。彼の毛布を覆っていたある村人が取るうとして、少し騒動になるという事件も起こった。それほど、かつてない、異様な盛り上がりがあるこのパーティではあった。

パーティー後、キャンプだけで夜に小さな花火大会を行った。

いよいよ、お別れの日。今回のキャンプは、最後まで非常に特殊なキャンプであるように思えた。それは皆がこのように思っていたからでしょう。

「これでサヨナラじゃない。またここで会つまでの、暫しの別れだ」と。悲しみを堪えながら、このキャンプの終幕を迎えることとなった。

● リーダーとして キャンパーとしての感想

総括して言いますと、今回のキャンプは、本当に「自由」なキャンプでした。それは、ワークしている時間よりも、何か別のことをしていた時間の方が、多かったと思えることから領けます。各自が自分のアイデンティティを持ち、自分のしたいと思うことを優先して行い、特に、このことが村人により密にコミュニケーションが取れた要因だと考えています。ただ、この考えのまづい点は時間に対してルーズになること。これは、自分自身もつと注意しておきたかったことです。

過去のキャンプからは想像できないほど村人は、我々に対して心を開くようになってきています。それは、パーティでの様子からも一目瞭然です。彼らの精神面のケアは我々にとって課せられている、次の見えないワークなのです。まだリンホウ村には、解決しなければならぬこのような問題はあります。それに、もつともつこのキャンプを通してでも、中国の人々がこのことに興味をもつて欲しいと願ってやみません。

では、最後に、あるキャンパーのメモを載せておきます。この言葉が、今回のキャンプを叙事に物語っています。

始め、本当はいやだった。ぎしぎしなる硬い板の上で寝ることも、初めての寝袋も、ご飯にハエ

がとまることも。でも今では、こうやって音楽を聞きながら気持ちのいい風を浴びて、村の人のいれてくれるお茶を飲みながらこののどかな景色をみて、のんびり過ごすこんな時間に安心感を覚える。
「今何時？」
「わかんない。」
こんな会話が流れるなんて日本ではなかなかない。すごく癒される。



呉川キャンプ報告

2月7日から3月2日まで広東省呉川市土光医院、(ハンセン病快復者村)にてワークキャンプを行った。



●メンバー

日本側 槻 美代子、吉田 亮輔、
原田 僚太郎。

中国側 シャオピン、ジエチョン、
ユエユエ、アーチュアン、シーピン、
その他6名



●ワーク

トイレ作り 快復者の息子(30歳)を技術者として雇い、建物、トイレ3個を作った。



壊れた井戸の修理



村の状況

四十名以上いるらしいが、常時村にいるのは、三十名弱その他子供達が6人。子供の声が常に聞こえ、仲良くしゃべっている村人を多く見る。

●村での生活

キャンパー用に二部屋借りた。お風呂はお湯を浴びる。トイレはちょっと離れた場所にある。
基本的に自炊。後半からは村長が作ってくれた。



●下見では分からなかった事

- ・子供が3人週末になると帰ってくる。実際に快復者の子供は1人。1人は養子。
- ・ボロボロの家に7人程しか住んでいない。
- ・義足でも走ることや、ワークすることができる。
- ・自転車や、バイクに乗る村人も多い。
- ・訪問者も割と多い。
- ・キリスト教系の援助が入っていること。



● 良かった点

- ・地元学生の参加 5月に最訪問予定
- ・キャンパーが少ない為、話し合いがスムーズ。必ずしも、深い話ができたとは言えないが・・・
- ・子供達に英語を教えるなど、付加価値もあった。



● 問題点

- ・キャンパーが少ない為、ワーク費の大部分を中国の口座のカンパからもらったこと。
- ・ワークだらけで、一日が終わることが多い。結果、村人と話す機会が減る。
- ・ワークキャンプ終了日がワークが終わるまでという事から、計画が立てられなかった。



- ・あまりに山奥の為、キャンパーだけでは食料が確保できない。
- ・次のリーダーがいらない。
- ・隣の村に1人で暮らす快復者がこの村に引っ越したいのだけど、部屋が無い為来れないらしい。実際、部屋は余っていないけど、キッチンとして何部屋も使っていたりする不思議が残った。
- ・呉川語を学ばなければ、村人と話ができない。しかし、教科書などない。字を書く村人が少ない為、日本人だけだと直接会話が出来ない。

● キャンプが村に与えた影響

キャンプ前の村の状況の多くを知っている訳ではないから、どう変わったかなど分からない。ただ、キャンプ地を去る時に多くの村人が見せた涙が何かを物語っているのだろう。村長は村が始まって以来こんなに楽しい日々はなかったと言った。実際、村人達はキャンパーの所へよく顔を出し、笑顔をみせた。



● 今後の予定

ワークの可能性は、道路の舗装、家の修理だが、お金を渡せば、村人が勝手にやってくれる気がする。もちろんそのお金は無いが・・・是が非でもキャンプをする必要はないのではないか。何にしても、今の所は何も決まっていない。

関吉田亮輔



フレンズ国際ワークキャンプ（F I W C）関東委員会主催シンポジウム

「ハンセン病が、アジアをつなぐ—中韓日の学生による、ハンセン病快復村支援ネットワーク」

日時： 5月9日（日）14：00～16：00

会場： 中央コミュニティーセンター（0422-53-3934、武蔵野市中町3-5-17）

JR中央線吉祥寺駅下車、北口バスターミナル（関東バス）1、2番乗り場「成蹊学園経由（全線可）」乗車、「文化会館前」バス停下車

第1部（14：00～）： 柳川義雄講演「ライはアジアをつなぐ」

第2部（14：20～）： 原田僚太郎「ハンセン病快復村支援の中韓日ネットワーク」

第3部（14：40～）： ハンセン病快復村ワークキャンプ報告（中国リン HOW 村・土光村、韓国定着村）

第4部（15：10～）： パネルディスカッション—山下道輔、柳川義雄、原田僚太郎、西尾雄志（進行役）

司会： 西尾雄志

「私は日本に対してちょっとの好感も持っていなかった」。

ある中国の学生はそう語った。彼女はワークキャンプに参加し、日本へのイメージを新たにした。

ワークキャンプが中国と日本の学生をつなげている。その舞台は、中国のハンセン病快復村だ。ここはかつて、ハンセン病を病んだ人々を隔離する、「人と人とのツナガリ」の破壊の象徴だった。そこが、今、出会いの場となっている。

韓国のワークキャンプ団体も中国のハンセン病快復村で活動している。中国、韓国、日本の学生がつながり始めた。

「ライはアジアをつなぐ」。

詩人・大江満雄がかつて語ったこの言葉は、現実のものとなりつつある。中国、韓国、そして日本。歴史的因縁を持つこれら3国の間に、ハンセン病快復村支援ワークキャンプを通して、ツナガリが生まれる。

*

第1部では柳川義雄が、「ライはアジアをつなぐ」というコンセプトを紹介します。なぜ、ハンセン病が中韓日の3国をつなぐことができるのか—。

第2部では、そのコンセプトを実行に移している原田僚太郎が、2003年4月からの中国での活動内容を報告します。彼は中国南部にある5つのハンセン病快復村でワークキャンプをコーディネートしています。

第3部では、実際に中国、韓国のハンセン病快復村でのワークキャンプに参加した日本の学生たちが、そのキャンプでの様子を報告します。

そして第4部では、国立ハンセン病療養所・多磨全生園入所者の山下道輔さんをお招きし、ディスカッションを行います。

講演者、パネラー紹介

山下道輔...多磨全生園の入所者。後世の役に立つように、長年ハンセン病関係の資料を収集している。

柳川義雄...F I W C 関西委員会所属。ワークキャンプ歴30年。1970年代、韓国のハンセン病定着村でワークキャンプを立ちあげる。2001年には韓国ピースキャンプと共に、中国のハンセン病快復村での初めてのキャンプを創った。

西尾雄志...F I W C 関東委員会前委員長。現在、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師（インストラクター）

原田僚太郎...2003年4月より、F I W C 関東委員会中国ワークキャンプ現地駐在員として、中国のハンセン病快復村でのワークキャンプをコーディネートし、ハンセン病快復村を支援する学生のネットワーク構築を目指している。

「来吃飯！中華料理を食べようの会」（懇親会）

時間：16：00～18：00

会場：武蔵野市中央コミュニティーセンター

会費：一般2000円、学生1000円

問 原田僚太郎

韓国キャンプ

韓国キャンプでは今、韓国側のパートナーであるハナ会にワークをする村を探してもらっているところです。日本では前回のキャンパーらと集まって食事をしながら、次のキャンプについて話しました。今後はハナ会側と相談しながら、村の候補をいくつか挙げて、下見に行こうと考えています。また、5月9日の報告会に向けて準備をしていくつもりです。

中島 弘矩

次回の定例会報告

次回の定例会は6月20日(日)です。場所は吉祥寺本町コミュニティセンターで5時から開催します。夏からのキャンプに向けて各キャンパーからのいろんな意見や考え、また夏キャンプに向けての意気込みを熱く語りましょう!皆さん是非参加してください。

FIWC 関東向けカンパ納入者: 匿名

中国駐在員カンパ納入者: 中田ひとみ、匿名

年会費納入者: 福井新、井木沢稔、木村聖哉、木村仁、浜島恭子、笠眉彦、李玲子

ネパールキャンプ参加者、匿名

ネパールキャンプカンパ: 鳥居厚志、富部一秀、一色嵩典、大野薫、小河原英貴

檜山武史、鈴木孝三、和田昭子、茂木亮



住所: 東京都武蔵野市吉祥寺本町 1

電話番号: 0422-22-7002

吉祥寺駅中央口から徒歩5分

以上、敬称略。領収書が必要な方は、ご連絡ください。

いつもありがとうございます。

編集後記

「まひとさーん。編集作業っていつ終わるんすかねえ・・・」(山)
「まだ原稿来てないから今日中には終わらないよね。」(真)
「洋は原稿書き終わった～?」(山) 「日付変わるまでにはなんとか・・・」(洋)
「・・・・原稿書き始めて何時間経ちましたっけ?」(山)
「え～っと、マサランチに来たのが3時だから、7時間以上経ってるね。」(真)
「洋っ、これ書くまでピザ食べちゃ駄目ね!」(山)
「ええ～!! 腹減ったんだけどおぉ・・・・分かったよ・・・・」(洋)
「じゃ、先に頂くね～」(真)(山) 「ぶはーっ! やっぱビールだなあ!」(真)
「いやいや、こっちのピザもいいっすよ!」(山)
「残しといてください・・・・・・。」(洋) 「・・・・右図へ。」



PDF 版では個人の連絡先を掲載していません

問い合わせはモグネットへどうぞ

定例会報告

2004年4月号

2004年 4月28日発送

フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会

委員長・・・藤沢真人

編集・・・山川将弘、藤沢真人、伊藤洋、立花ひと美

モグネット
www.mognet.org

